

県北 どらくろあ

第19号 2017年10月1日（毎月1日発行）

県北群星伝⑪ 歌と笑顔の伴奏者

ふるかわ よしき
古川由紀 76歳（庄原市西城町）



重さ十五キロのアコーディオンを自在に操りながら、自ら大きな声で歌う。まるで全身でタクトを振るように、リズムカルに体が躍動している。励まされるように、参加者が唱和する。曲を重ねることに、みんなの笑顔も歌声も明るく元気になる。

庄原市西本町にある市民の交流サロン「楽笑座」で、毎月九日に開催される「うた声喫茶」は、九月九日で第五十

音楽の教師だった。放課後に、学校のピアノを使ってのサークル的なピアノ教室が開かれた。最初はクラスのほぼ全員が参加していたが、最後は古川さん一人になってしまったという。卒業するまでの三年間で、音楽やピアノの基礎をしっかりと学ぶことができた。

中学に入ってから、音楽室にあるピアノを勝手に弾いて遊んでいた。小学生のときのような勉強のための練習曲ではなく、おもに歌謡曲のメロディを自分で適当にアレンジして演奏していたという。

アコーディオンと出会ったのは、高校を卒業してから。西城町の役場に就職した古川さんは、地元の青年学級に参加する。自分が卒業した美古登小学校の教室に、そのアコーディオンがあった。どうしてそこにあったのか、今でもわからないという。

ピアノと同じで鍵盤があるのだから大丈夫だろうと弾いてみたが、まったく音が出ない。弦をたたいて音を出すピアノと、空気を送って音を出すアコーディオンとは構造がまったく違っていている。あれこれと蛇腹に空気を送り込もうと試してみるのだが、どうしても音が出ない。持ち前の負

けん気と好奇心が頭をもたげた。

教えてくれる人も、教則本もありはしない。すべては手探りの独学だった。やがて、自分でもアコーディオンを手に入れて、自宅で猛練習。音楽やピアノの基礎はできているので、演奏のコツがわかれば上達は早い。今では、童謡から歌謡曲、演歌まで、楽譜を見ないで弾けるレパートリーは約五百曲あるそうだ。

デビューは町役場の忘年会だった。アコーディオンの演奏や伴奏で大いに盛り上がった。以来、古川さんのアコーディオンは、職場の宴会には欠かせない定番となった。職場の慰安旅行にも、相棒のアコーディオンを抱えて行ったという。

時代は昭和四十年台に入った頃で、全国のあちこちで歌声喫茶が産声を上げていた。古川さんのアコーディオンも職場を飛び出して、喫茶店で伴奏するようになる。多くの若者たちが参加して、店内は熱気に満ちていた。

しかし、カラオケの登場で、古川さんのアコーディオンは次第に活躍の場を失うようになっていく。いつしかアコーディオンは、

倉庫にしまわれたままになった。私見だが、一人で歌うカラオケは、個人主義の象徴のような気がする。みんなで何かをやるという熱意が、時代とともに希薄になっている。

平成十七年、西城町の役場を定年退職した古川さんは、再びアコーディオンを手にする。「地元への恩返しをしたい」と、同町のサークル「歌声ひろば」で伴奏を再開。デジタルの音声ではない、寄り添うような優しい音色が共感を呼び、演奏の依頼が増えて行った。

今では庄原市以外でも、三次市、安芸高田市、神石高原町と活動の範囲は広がって、月に五回の定例会をこなしている。敬老の日のある九月は慰問の依頼も多く、うた声喫茶を含めた演奏会が全部で十四回。こうしてアコーディオン再開後に積み重ねてきた演奏会は、楽笑座の九月の「うた声喫茶」で八百三十回になる。当面の目標は千回！

アコーディオンの演奏以外にも、古川さんのスケジュール帳は埋まっている。西城町神楽愛好会の会員として、また神楽太鼓の奏者として、週一回の練習に参加している。地元の社交ダンスグループ「ホワイトクラブ」の活動が月に二回。そんな多忙な古川さんの元気の素は、「みなさんの笑顔とおいしいお酒」なのである。

図書館員ノート ⑭

「わたしのカラー」

「ミカミねえさん!!」と今日も、子どもたちの元気のいい声が聞こえる。名まえを呼ばれると、「ああ、なんかいいなあ、この感じ」としみじみ思う。強要したわけでもないのになぜか、子どもたちからは「ミカミねえさん!!」と呼ばれ

れている。

地域の図書館だから、利用者との距離がとても近い。私が勤める図書館は小学校が隣接しているので、窓から外を見れば、小学生が体育の授業をしていたり、休憩時間に鬼ごっこで走り回っている姿が見える。そんな中に、返却期限切れの本を中々返してくれない子や、予約の本を借りに来てくれない子の姿を見つけると、私も靴を履いて校庭に駆け出すことがある。

お昼休憩になると我先にと、図書館に駆け込んで人気の本を借りていく子がいたり、一冊の本を数人で囲んで「キャツキャ」言っている子がいたり、静かに図書館に入ってきて、いつのまにか私の隣に立っている子がいたりする。

分館勤務になって三年目。最近では、他の事業所の方から「馴染んどってじゃけー、地元の人かと思っ

た」と言われることもあり嬉しく感じている。「やるもやらぬも自分次第」をモットーに。館内の展示など、どうすれば子ども達の「おお!!」という反応が得られるか? どうすれば、「おもしろい」と感じてもらえるかを日々追求して意外に楽しんでいく自分に気づく。

でも、時には、思い描いた結果と違って落ち込むこともある。そういう時、図書館を見渡してみると私色に染まってきているのがよくわかる。今まで、なかったものが沢山目の前に見えてくる。小学生が授業で作った模造紙の図書館新聞、百冊達成の木に飾られた写真の数々、オススメ本の紹介カード、そして、私の肖像画(笑)。今まで、力を尽くしてきたモノが形として現れている。

「ねえ、ねえ!!」だれかが私を呼んでいる。「うん! まだまだ! やるもやらぬも自分次第!!」奮闘の日々はつづいていく...



司馬遼太郎『花神』 ——歴史小説の面白さに納得

軽い気持ちで、「歴史小説を」と手に取ったが最後、すっかりとりこになるのが司馬遼太郎の小説の数々です。今回は兵学者としての大村益

次郎を描いた『花神』（新潮社版、全4巻）を取り上げます。時代の変わり目だからこそ、世に出たと思われる男。その痛快さに魅せられます。

ご存じのように、司馬遼太郎は明治維新に限っても、坂本竜馬を主人公にした『竜馬がゆく』（文藝春秋版、全5巻）で人気を博したのを皮切りに、越後長岡藩の家老河井継之助を扱った『峠』（新潮社版、上下巻）、吉田松陰や高杉晋作を追った『世に棲む日日』（文藝春秋版、全3巻）、西郷隆盛と西南戦争を取り上げた『翔（と）ぶが如く』（同、全7巻）、それに日露戦争を見据えた『坂の上の雲』（同、全6巻）などを次々と新聞に連載し、人物と時代を生き生きと描きました。

『花神』の題名は、辞書では「花をつかさどる神」ですが、「時代に花咲かせた人」といった意味に使われているようです。主人公の大村益

郎（通称・村田蔵六）は長州の村医者（通称・村田蔵六）は長州の村医者の家に生まれ、大阪に出て緒方洪庵の適塾で蘭学を修めます。そして、

かれます。この背景には、言うまでもなく黒船来航があり、危機感を抱いた藩の思惑がありました。さらに極めつきは、これを知った長州藩が、蔵六を呼び戻し、軍務の要職を担わせます。呼び寄せたのは、藩内改革をめざす桂小五郎でした。

また読んでみたい本①9 ——青年たちに

音谷 健郎



【花神 表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思います。毎月1冊ずつ紹介しています。

第19回は、司馬遼太郎の『花神』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

郷里・長州に帰り医者を継いでいました。適塾では塾頭を務めるほどでした。福沢諭吉は9年後輩という。蔵六は、友人を訪ねた先の伊予宇和島藩で、求められて軍艦建造にかかわり、その洋才ぶりを買われて幕府の蕃書調所（洋学の研究所）に招

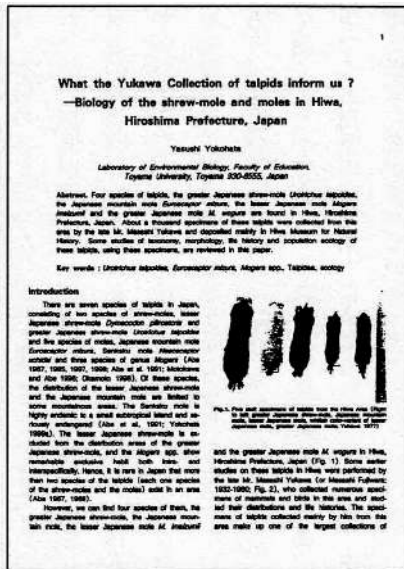
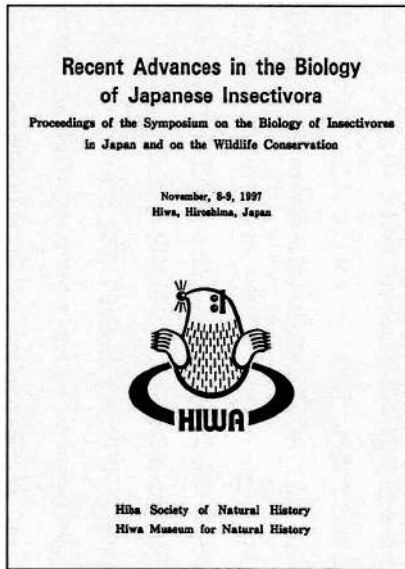
第2次長州征伐の時には、蔵六がひきいる部隊は幕府軍を軽々と打ち破ります。このあたりに、「時代の要請」というものが、際だった個性に支えられて実現していく様子がうかがえます。蔵六は、無愛想で変人扱いされて

いました。近代合理精神を身につけた蔵六は、封建的な身分などものともせず、普段着の身なりでした。戦の勝利は、百姓町人を集めて兵隊として訓練した賜です。明治の徴兵制の始まりとも言われています。長州藩が天下とった維新後は、官軍の事実上の総参謀として戊辰戦争に活躍。近代日本の軍政の基礎を作ります。だが、封建制の因習にとらわれた政敵の刃に倒れます。時代を先取りした才と精神による蔵六の活躍が、胸を躍らせます。もう一つ、見逃せないのが司馬遼太郎の語り口です。寄り道しながら、時代の背景を現代に引き寄せて、丁寧に描いてみせていることです。島崎藤村『夜明け前』との違いは、ここにあります。『夜明け前』では、時代との摩擦を主人公の内面の葛藤として、作者もいっしょに深く悩んでいます。これに対し、司馬遼太郎の描く世界は、過去の歴史であるが故、主人公を突き放し、背景の事実の範囲で、自在に鳥瞰的に描いています。読者も少し余裕を持って、主人公を応援できます。人物が丸見えになる面白さです。読みながら、明治維新の歴史を身近で観察した気分になるから、不思議です。

虫と草木と人びとと⑦ 中村慎吾

「湯川仁さんのこと」後編

一九八二年（昭和五七年）八月、これを記念して県内各地で活躍している小・中・高等学校の教師が自から国大会が開催されることになり、この目と足で、一九八〇年初頭の広島



モグラサミット英文報告書の表紙と巻頭の横畑泰志博士の論文

著者紹介…一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

県の生物相を明らかにしようということになり、そのプロジェクトが一九七九年に発足し、一九八二年七月完成を目標に活動を開始した。哺乳類は湯川さんにおいて他に人がいないので、彼にこのプロジェクトへ参加してもらった。動物好きの彼のこと、嬉々としてこのプロジェクトに参加して資料の蒐集に当たっていた。しかし、「心臓に持病があるから長生きできない」と言っていた湯川さんの口癖は現実のものとなった。

一九八〇年五月二十八日、突然、湯川さんは死に襲われ、不帰の客となった。満四十七歳までにはまだ六日もある若さであった。死因は心不全、余りにも短い一生であった。

彼の葬儀が終ってしばらくして博物館に残された彼のノート、草稿などの整理を行なった。遺品の中に「広島県の哺乳類」のメモがあった。一九八二年の日本生物教育会を楽しみ

に約束どうり原稿をと思い、構想を暖めていたようだった。未完のまま死を迎えたのは無念なことであつたであろう。また、定年退職後は集めた標本を整理し、広島県哺乳類誌をまとめたと言っていたこともかなわず死を迎えたことは更に無念だったことであろう。「広島県の哺乳類」はメモ等の遺稿をまとめ、一九八二年七月に刊行された「広島県の生物」に掲載させて頂くことができた。また、広島県哺乳類誌は湯川さんを知る内藤順一さんを中心に若い哺乳類の研究者たちの手で「広島県の哺乳類」にまとめられ、この程、中国新聞社から発行された。ようやく、広島県にも若い有能な哺乳類学者が育っている。

創立以来四十年以上も間借りを余儀なくされていた博物館は、四十年目の一九九〇年（平成二年）にやっと独立した建物ができ新たな装いの

もと大きな第一歩を踏み出している。そして、湯川さんが遺したコレクションは多くの研究者の注目を集め、特にモグラ類の標本から新たな事実が数多くみつかった。それらは横畑泰志さんによって「広島県比和町におけるコウベモグラの齢査定法およびその個体群の齢構成」などの論文にまとめられている。そして、一九九七年十一月八〜九日の両日、博物館で全国から二百名が集まり、「野生動物の保護をめざす『もぐらサミット』」が開催され、比和の博物館は名実とも「もぐら博物館」となっている。

「もぐらサミット」が縁で一九〇六年五月十三日、神戸で採集され、ロンドンの自然博物館に収っていたコウベモグラの標本が奇縁でロシアに渡り、ロシアのノボシビルスクにあるシベリア動物学博物館に保存されていたが、比和の博物館は「世界で唯一のモグラ博物館」であるということから、シベリア動物学博物館から比和町へ九十二年ぶりに里帰りし、今、博物館の重要な標本として大切に保存されている。

若くして不帰の客となった湯川仁さんのことを思うとき胸がつまり、深い悲しみを覚える。しかし、湯川

さんの播いた種子は芽をふき、すくすくと育ち、花を開き始めていることをみるといささかの安らぎを覚える。やがて、次の世代には実を結び、その実から新たな種子が広がり、また、新たな芽がふき、花をつけることであろう。このことこそ、つまり、湯川さんの遺産を継承しながら新たな発展を図ることこそ、湯川さんの鎮魂となると考える。

どら書房 委託販売コーナー

★「天馬書林」

新書の教養書や人生指南本、ノンフィクションが充実。

★「サワちゃん文庫」

中国、日本の歴史書、思想書が中心のラインアップ。

各専用棚で好評販売中！

「秋風に乗せて 里山に響く JAZZ の調べ」

第4回山法師コンサート

■2017年10月15日(日) 開場13:30 開演14:00

■前売 2,500円 当日 3,000円

■会場 じんせきの里 (神石高原町総合交流センター)

秋の恒例となったJAZZの里山コンサートが、さらにパワーアップして帰って来ます。多彩なゲストによる自由で豊かな音色を、生演奏の迫力を、体感してください。一緒に楽しみましょう！

林栄一
アルトサクソ

出演 小山彰太 (ドラムス) 林栄一 (アルトサクソ)
大塚ひろこ (ヴォーカル) 水谷浩子 (アルトサクソ)
Cornus Kousa (3人の女性奏者による音楽ユニット)

主催 山法師コンサート実行委員会
問い合わせ 0847-87-0089 (三上祥子)



「どうだい調子は？」
「だめだよ。健康診断に行くたびに、薬が増える」

新井のぼやき声が聞こえてきた。わたしも似たようなものだ。血圧の薬とコレステロールの薬、痛風の薬をのんでいる。晩酌を控えればいいのか、薬をのんでいるから大丈夫だと開き直っている。食生活は……、無理だ。自分で作れるのはインスタントラーメンぐらいのものだ。一昨年離婚して一人暮らしをするようになってからは、食事は外食か、スーパーの総菜に頼っている。

「お互い、もう還暦だからな」
自嘲めいた笑いが電話口から聞こえた。

「ところで、黒田なんだが」
病室に見舞った時の様子を話している。脳梗塞で、右半身に麻痺が残っている。顔が別人だった。シヨックだったのだろう、ちゃんとリハビリをすれば回復も見込めると先生は言ってるんですよ、奥さんの言葉を虚ろな目で聞いていた。

「あの筋肉バカのお祭り男が……」
新井が絶句した。中学高校と陸上部だった黒田は、高校生のときに百米トールのスプリントでインターハイに出場している。地方の公立高校

の陸上部にとっては、創部以来の快挙だった。

わたしと黒田、そして新井は、同じ町内に住む幼馴染だ。

地元の神社の秋祭りで、「御神行」という行事がある。さまざまな神具を掲げて、大行列で町内を行進する。

花形は二基の神輿（みこし）で、「ワッショイ、ワッショイ」と掛け声をかけながらねり歩く。花代の寄進

「暴れ神輿」

みこし

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑱

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

を受けると、その人の家の前で神輿を何度も大きく持ち上げて、掛け声も勇ましく、当家の御多幸を祈念する。

秋祭りの氏子の担当地区は順番で、御神行のメンバーは毎年違っているのだが、黒田が中心になって仲間を集めて、神輿の担ぎ手として売り込んだ。花代から出るバイト代が目当てだった。

神輿は一基で十人の担ぎ手が必要だ。わたしも新井もそのメンバーだったが、大学を卒業して就職すると、

チーム黒田は自然消滅した。実家の工務店に就職した黒田だけは、四十代の半ばまで神輿を担いでいたらしい。

「ひさしぶりにみんなで集まらないか。チーム黒田の同窓会を開いて、あいつを励ましてやろうじゃないか。

黒田のメンバーが全員、顔をそろえたのだ。神輿を担いで以来で、会うのが三十年ぶりの人もいる。

田中はすっかり頭が禿げ上がってしたが、笑うと懐かしい童顔が現れた。菊池はカンボジアから駆けつけてくれた。PKOの職員として、農業指導の仕事をしているらしい。丸田は五十代で若い嫁さんと再婚して、子供を三人もつくっている。

みんな齢を取った。じじいになった。前歯が全部なくなっているやつがいたが、一時はホームレスにまで転落したという。今は管理人の職を得て、娘と一緒に暮らしている。みんな、よく生きていてくれた……、しみじみとそう思った。

掛け声が聞こえてきた。新井の顔を見ると、力強く頷いた。傍らに立っている青年の肩をたたいた。小柄だが、父親譲りの筋肉質の体をしている。

最後は、自分に言い聞かせるように言った。
「よし、やるか。どれだけ集まるかわからないが、連絡だけはとってみるよ」
新井が快諾してくれた。

それは、奇跡だった。昔のチーム

御神行の先頭を歩く神輿の姿が見えてきた。金色の装飾が、秋晴れの太陽を浴びて眩く輝いている。担ぎ手は白装束を着た若者たちで、そのほとんどがバイトで雇った大学生だときく。山間の過疎地では、とくに若者の減少が著しい。

「よし、行くぞー！」



みんなに声をかけて、神輿に近づいた。再結成されたチーム黒田も、すでに白装束に着替えている。神官の許可をもらい、神前での禊（みそぎ）も済ませている。

事前の打ち合わせ通り、交差点の曲がり角で担ぎ手を交代した。折りたたんだバスタオルを肩と衣装の間に挟んで、ヨイショと気合を入れてから親棒（担ぎ棒）を持ち上げる。ズシリとした重量が、右肩から全身にのしかかってくる。神輿を担いだあとは、肩の皮膚が擦り剥けて、風呂にも入れないほど真っ赤に腫れあ

がったものだ。

この日の為に断酒して、早起きして走った。暇を見つけては、腕立てふせやスクワットで体を鍛えた。最初はひどい筋肉痛で体が悲鳴を上げたが、続けるうちになじんできた。キャベツと人参を大量に買ってきて、生のままでマヨネーズをつけて齧った。

他のメンバーも、今日の目を目標に、トレーニングしてきたはずだった。そうでなければ、還暦になって神輿を担ごうなどと無謀なことをする気にはなれないだろう。「いくぞ！ ワッショイ、ワッショイ……」

足を踏み出す。膝の関節がギシギシと悲鳴を上げる。一瞬、神輿がよろけたような感覚に背筋が冷えたが、すぐに態勢は安定した。掛け声で自分を鼓舞するように歩を進める。目標は三十メートル先。それが、とても遠い……。

黒田工務店と画かれた看板の下に、松葉杖をした男が立っている。わたしの号令で神輿が止まると、黒田が驚いた顔でわたしを見ている。傍らの奥さんが、祝儀袋に包んだ花代を先導の役員に渡している。

「黒田工務店のご多幸を祈念して、

ワッショイ！」

反動をつけて、親棒をさらに待ち上げる。ワッショイ、ワッショイ、と大声を張り上げながら、息を合わせて神輿を上下させる。いい感じだ。（黒田、来年は一緒に神輿を担ごう）

心の中で叫んでいた。今回は黒田の息子が参加してくれた。おまえが戻ってくれば、チーム黒田の完全復活だ。一度だけでもいい。もう一度、おまえと神輿を担いでみたい。「よし、ビッグウエーブやるぞ！」

暴れ神輿と呼ばれたチーム黒田のオリジナルだ。左右で交互に神輿を持ち上げて、大きく波打つように操る。傾いた神輿の重量がさらに増して、肩にのしかかってくる。調子に乗りすぎた。二回ばかりウエーブしたところで、神輿が大きく傾いた。見守っていた大学生の担ぎ手たちが、あわてて駆け寄って来る。

担ぎ手を交代してもらったわたしは、その場にへたれ込んだ。目の前に逞しい手が差し出された。黒田が笑っている。

〔写真は庄原市本町にある丑寅神社。今回の作品は丑寅神社の秋季大祭御神行を題材にしたフィクションです〕

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※10月5日(木)から11日(水)まで臨時休業します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL: 090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 1,5000円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「馬賊戦記」

朽木寒三 著 番町書房

大正5年、若干16歳の小日向白朗は中国の地を踏む。冒険を求めて蒙古街道を北進中、馬賊に襲われて捕虜となる。馬賊は単なる盗賊ではなく、農民の自警団から発展した武装集団で民衆の英雄だ。雑役夫として馬賊の配下になった白朗は、持ち前の豪胆さを発揮して数々の武功を立て、大頭目にのし上がる。

前半は太閤記のような立身出世物語。馬賊の頭目になってからは、数々の英雄豪傑と義兄弟の契りを結び、東映の任侠映画の趣。お尋ね者になってからは、道教の総本山「千山」で武当派拳法修行、暗殺者となる。金庸の武侠小说の世界だ。聞き語りのルポなのだから、近代中国の裏面史でもある。



「極小邸宅」

新庄耕 著 集英社

不動産会社の殺伐とした世界が舞台。売れない社員はゴミ扱い、深夜のチラシ配布や看板を前後に背負って物件を連呼するサンドイッチマン等々、陰湿なイジメのような業務が課せられる。「お前らは売る以外に存在する意味なんかねえんだっ」、罵詈雑言、殴る蹴るは当たり前で、ブラック企業の実態が生々しい。

上司から退社を勧告されるダメ社員だった主人公が、運よくお荷物物件を売ることができて、凄腕の営業マンの上司に目をかけられる。売るためのノウハウがリアルで迫力がある。支店のエースにのし上がった主人公だが、自分が大切なものを失くしていることに気づく……。2012年、第36回すばる文学賞受賞作。



「霊園はワンダーランド」

小笠原和彦 著 現代書館

「ホームレスと過ごした一年間の記録」の副題。20世紀末の不況下で、50歳を超えた筆者がようやくありついたのが、日当7500円の警備員の仕事だった。勤務場所は公立施設という募集だったが、配属されたのは霊園。さまざまな人が集まって来る。犬と散歩する人、ランニングする人、車の中で生活する家族、花や果物の供物の転売目的で来る人もいる。



そして、個性豊かなホームレスの人たち。お目当ては供物のお酒だ。墓参客がいる間は、供物を下げないという暗黙のルールを守っている。寒い日は、毎夜のように宴会。行き倒れも出る厳しい世界だが、霊園は行き場を失った人たちの楽園でもある。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇

天高し少年天守閣が好き

近藤 昌平

秋深し風土記の館に欠け埴輪

原 博己

夕顔の真白き闇の深さかな

片岡 正人

みみず
蚯蚓鳴く他に物音何もなし

隆 愚

靴音も神楽囃子の石畳

赤川 冬人

投稿&寄稿

「柿の木」

M・A

秋は実りの季節である。新米はもちろん、果物もたくさんできる。うちには農家ではないので、もぎたてを食べるといっわけにはいかないが、子どもの頃は、友だちのうちに遊びに行つて、柿やイチジク、キイチゴなどの実を採って勝手に食べていた。

柿は皮ごと食べると消化に悪いし、たくさん食べると腹を冷やす。イチジクの実の茎から出る白い汁が皮膚にふれるとかぶれてしまう。柿

※投句を歓迎します。

きのことを思いだして、考えることがある。果たしてあの柿は誰のものだったのか？川べりは公有地なので、市民である自分が食べても問題はない、当時はそんな理屈をつけていたが、本当はどうなのか。畑の畔に植えた人ののであれば、柿泥棒である。

今でも柿は好きだが、頭のどこかで買って食べるものではないという意識があつて、店で買い求めたことはない。さすがに子供の頃のようにその柿を取って食うわけにはいかないで、柿の木を庭に植えていたのだが、なかなか実をつけてくれない。今年も梅雨時期の豪雨で、小さな実が全部、落ちてしまった。さて、あの川べりの柿の木だが、何年かして帰郷したときに見に行つたが、護岸工事で川の土手が整備されて姿を消していた。あの柿色も、今ではセピア色になつてしまつてゐる。



しらゆき姫 第18回庄原こどもミュージカル

脚本・指導・演出 / 増田 明

第1公演 13:30~15:00 / 開場 13:00 第2公演 16:00~17:30 / 開場 15:30

入場料 一般・小学生以上 1,000円 全席自由 未就学児以下無料

主催：庄原こどもミュージカル実行委員会 お問い合わせ ☎090-2006-6982
チケット取扱所：

- ジョイフル2F サービスカウンター ●庄原市民会館 ●サングリーンサービスカウンター
- 小池書店 ●庄原市西城保健福祉総合センター「しあわせ館」 ●児玉医院(川北町)
- 庄原・三次市内の中国新聞販売所他

10/29(日)
庄原市民会館
大ホール

「趣味で始めた土鈴作り

三十六年を終わって」(前編)

富久光



昭和五十六年の夏、当時の庄原郵便局長、児玉吾郎さんから自作の小さな土鈴をいただいた。無花果型の素焼きの土鈴だった。受け取った瞬間、初めて耳にした素朴な心地よい音色に驚いた。それまで、児玉局長と面識はなかった。

その数年前まで、市内の三日市町の現在の桜学園の近くで、特に伊賀焼きに取り組んでおられた陶芸家、広瀬環拙さんの所へ、土日はお邪魔して陶芸の話の聞いたり、窯焚きの手伝いなどをしたことがあった。時には、大事に桐箱に納められた、欠けた茶碗を取り出し「焼き物はな、欠陥の美ちゆうことがおましてな」等と、当時の私としては理解に苦しむような事を云われることもあった。

環拙さんは、兵庫県のご出身と聞いていた。若い頃、果樹園主任技師として働いた事もあるとも聞いていた。陶芸窯は炭窯を大きくしたような窯だったが煙突は随分高い位置まで伸びていた。総てが自ら手作りされたものだった。周辺には大きな桃の木が数本あり、庄原で一番美味しい桃だと云って、収穫期には、必ず桃一箱、錆びた自転車の荷台にくくりつけて自宅へお持ち下さった。私にとって忘れ得ぬ懐かしい人なのである。

環拙さんの没後、想い出を同人誌『遠景』に書いたことがあった。遠景は、先輩の俳句友、近藤昌平さんに進呈した。近藤さんは当時、庄原郵便局にお勤めだった。遠景は、近藤さんから、児玉局長へと、私の愚作

をお読み下さったのである。そんなご縁で私に土鈴を届けて下さったのである。

当時、私は事務職員として庄原小学校に勤めていた。夏休みに入ってもないある日、若い教師の若山先生、給食調理員の神原さん、私の三人で二時間の年休を取って、庄原郵便局へ出向き、児玉局長から土鈴作りを教わった。特に土鈴作りの説明はなかったが、あらかじめ作られていた直径一センチほどの中玉を手渡され、あとはひたすら児玉局長の手元を見ながら、見よう見まねで作った。もの作りに説明はいらぬ、見て覚えるものと知った。

中玉に紙を巻き、一定の大きさにくるんだところで紙玉に糸を巻き付けて丸みを整える。同じ紙の量であっても力の加え方により出来上がった紙玉の大きさは異なるのである。私は少々力を加え過ぎたので形は丸く整ったが硬くなり過ぎて、一回り小さくなった。その紙玉を粘土でくるんで土鈴の形作りをするのである。三人同量の粘土を使っても私の紙玉は小さい分だけ形成の段階で壁面が分厚くなった。厚くなった壁面のまま形を整えたので外見はいかにも初心者らしからぬ、無花果形の良形に仕上がった。最後に鈴口を針金製の

クリップを使って切り取った。少々深い位置まで切り取ったので気にはなったが、初めてにしては形よく整ったので、その時は気をよくしていたのである。約一時間余りかかって一個の土鈴を作った。その時は、焼けば確実に音が出ると信じ切っていた。児玉さんにお礼を言って、学校に持ち帰り、数日後、図工の山口先生にお願いして、焼いて貰った。数時間後、事務室へ持ってこられた三つの土鈴、私の土鈴だけ鈴口から袈裟懸けに大きな焼きひびが入っていた。若山先生、神原さんの作品は無難であった。私は、失敗するとやたら挑戦したくなるたちである。それから、家にいる時は暇さえあれば、土鈴作りに熱中するようになった。

児玉さんから一個の土鈴の作り方を教わった。戴いた一個の土鈴、教わった一個の土鈴が私の土鈴作りの原点である。児玉さんから戴いたのと同じ音色の土鈴が作りたい、そんな思から、作りやすい楕円形の小さな土鈴を帰宅後の一時を、休日は一月中作り続けた。最初は、図工の先生から小さな電気窯を借りて焼いた。その年の秋、教材店から電気窯を購入した。形や焼き色に拘ることなく音を出すことだけに集中する毎日だった。(次号に続く)

どらくろお 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

- 一 硬式テニス参加者募集 一
- MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
- 場所：三次運動公園の屋内&屋外コート
- ・火曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・水曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・土曜日 (12:00 ~ 14:00)
- 連絡先：中川 (☎080-5610-2376)

一箱古本市、店主募集中

本のフリマであなたの本を売りませんか？
(本があれば雑貨も OK)

日時：10月22日(日) 10:00 ~ 15:00

場所：哲西図書館周辺 (岡山県新見市哲西町矢田 3604)

参加費：500円 (東日本大震災の被災地の公共用図書購入費に)

申込 & 問合せ：哲西図書館 ☎0867(94)2110

《情報 & 原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室 & 講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター (現地記者) 募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろお ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

がらくた座ちいおばさんの人形劇

手袋人形劇「赤ちゃん黄色ちゃん」、なんでもおじさん人形登場!
長野県松本市から、がらくたから生まれた人形たちとやってくるちいおばさんです。
こどもからおとなまで人形とやりとりしながら楽しく参加できる会です。

- ◆ 日時：11月11日(土) 14時開演。会費は無料。
- ◇ 場所：庄原市ふれあいセンター (西本町 4-5-26)
- ◆ 問合せ：萬福寺 ☎0824-72-0292

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052 (赤川)
e-mail: touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円 (郵送料込)

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

◇ 庄原の毎月九日は、九日市以外にも楽しいイベントが楽笑座で開催されています。群星伝で紹介させていただいた「うた声喫茶」の他にも「まかない食堂」で地元の食材を使った料理が食べられます。詳細は楽笑座のフェイスブックのページで確認できます。◇ 我家の食いしん坊の飼猫ドラマが餌の時にでてきました。心配して部屋中を探索、布団にもぐり込んで寝ていました。朝夕が冷え込むようになりました。

編集後記

◇ 先月号の間違いを訂正させていただきま
す。「九日市だより」
での店舗紹介で「柳家
(ナギンチ)」は「柳家
(ナギンチ)」です。申
し訳ありませんでし
た。

第201回

「庄原九日市」

平成29年

10月9日 (月) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440年前）に物々交換で始まった市（いち）。
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
絵手紙大賞作品展
10月8日（日）～10（火） 10時～16時

★どら書房 臨時休業のお知らせ
（10月5日～10月11日は休み）

★三軒茶屋
リニューアル日替わりランチ700円（ドリンク
200円お替り自由）野菜を多く取り入れました。
★風龍 九日市スペシャル！ 餃子200円
★楽笑座では、まかない食堂（600円 40食）
うた声喫茶（13:30～15:00）

出店配置図



1 すけあくろう

2 ギャラリー三村

3 とらぢ
二八そば加工所
アーミュシュ
さだっさ
リトルマーメイド
健康企画グループ

4 なでしこ

5 ちくちくはうす玉手箱
工房アム 郷屋
かぐや姫 柳家

6 めだかの学校 愛♡BABY
ROOM OF KEIKO
やまのおみやげや

7 渡辺農園

8 タツミ矢

9 お休み

10 克國水産

11 前場衣料

12 お休み

13 山本水産
くんえん工房 香豚
ハナビラタケ広島

14 開盛社

15 佐藤園芸
砂田海産
田崎屋

16 お福
ドンダリーズ

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX (0824) 72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

